【追悼】（『統計学』第97号 2009年9月）

横本宏会員を偲んで

伊藤陽一*

経済統計学会の長い会員であり，支部のみならず学会全体の運営にも寄与されるところが多かった横本宏会員が，2009年9月13日午前0時45分に入院先で逝去された。享年70歳であった。氏は09年の年賀状で「退職後やることが多くて」と記していたが，5月末に膵臓ガンにかかっていることがわかり，6月に「先は長くはない。ついては，家族との付き合い等に残り日時をあてたいので，面会等は辞退したい」旨の手紙を広く配布されていた。8月後半の同窓の文集では，「肝臓への転移もあり，余命は短ければ数ヶ月，長くても数年とのこと」と書いていた。何らかの接触をしようと友人とも相談していた矢先の，余りに早すぎた訃報であった。

出身ゼミが同じで，関東支部で長く行動を共にした私がこの追悼を記すことになった。

1．年賦

氏の経歴は，以下のとおりである。

1939年7月24日東京都生まれ。

1958年3月　東京都立日比谷高校卒業

1959年4月　北海道大学入学，

1963年3月　経済学部卒業

1963年4月～1965年9月　北海道銀行勤務

1965年10月～1988年3月　国民生活研究所（→国民生活研究センター）調査研究部

1988年4月～2007年3月　明海大学教授で就任，この間98年から2年間，学部長を務め（98年に30周年記念式典の委員長），入試委員会委員長などを担った。

そして国民生活センター時代から，特に国学院大学で，さらに法政大学，そして退職後の2008年には，明海大学の非常勤講師を務めている。

2．研究業績

書評約10件をふくめ凡そ100程度の著書・論文がある。幾つかの柱にわけてみよう。

⑴家計調査・生計費・家計分析，消費者物価・生計費指数研究　上記の著書・論文のおよそ半分近くが，この柱に入る。このうち，1980年代と90年代半ばまでの幾つかを集めたのが（2001）『現代家計研究』産業統計研究社刊，である。氏のこのテーマは国民生活研究所の調査研究部で家計分析を担当したことから出発している。本書は，総論たる第1章を出発に，教育費，食生活，余暇，家計の負債と消費者信用，こづかい，そして世帯の発達による生活費の拡大と物価，という形で，家計支出の主要な項目が持つ現代的問題をとりあげている。氏の基礎的検討視角は「統計をみて生活をみない生活論」の批判，それに対置する論議の展開である。エンゲルやボーレー，ラウントリー，日本での労働科学研究所や中鉢氏などの古典的文献をこなし，問題の所在をおさえて，非常にわかりやすい筆致で書かれている。例えば，「教育費の意味と性格」の中で，「教育費の高騰が家計を圧迫するだけでなく，教育費が教育費に値する意義と意味をもっているのかを考えることも重要である」との指摘や，消費者信用での質屋との対比がある。そして，物価論議においては，同一生活水準

* 法政大学名誉教授。日本統計研究所客員研究員
〒192-0912　八王子市絹ヶ丘2-37-8

維持指数が提唱されている。家計分析を進めるにあたって，資本主義・日本経済の時代的変容にそくした生活実態に根差した研究のあるべき1つのパターンを示すものとして基準的文献の1つとみて良い。

この領域では，理論生計費・標準生活費，物価指数と生計費指数，家計調査一般（エンゲル，家計簿方式，費目改訂）や消費行動のソフト化・サービス化，家計調査や全国消費実態調査についての立ち入った検討や「こづかい調査」の実施などがある。

⑵労働者生活と国民生活　氏はその他に（1969）「労働統計」，（1990）「時短政策と統計からみた日本の労働時間」を，また上記領域を拡大して，後述の埼玉県での社会福祉指標研究との関連もあって，生活環境や公害，スタグフレーション・インフレ，情報被害，公共図書館，生活の社会化等のテーマを論じている。⑴をふくむこれら研究には，東京都研究会で一緒した暉峻淑子氏との他の共同研究（1982）『公共サービスとしての医療に関する研究』，（1983）『公共サービスと国民生活』，（1993）『豊かさへの接近』）等での意気投合によって，豊かさを問う見地が貫いている。

⑶統計学一般　①統計学の基礎的部分に関しては，（1972）「数理統計学と社会統計学」（国民生活研究12-2），（1978）「統計と何か」『統計学入門』（有斐閣新書），杉森滉一との共編（1995）『エレメンタル　経済統計』の第一章「経済統計でなにを学ぶか」など，統計の基礎に関して平易な説明を展開している。②統計学一般に関して注目すべきは，『蜷川虎三・統計学における基本問題』の（1988）［現代語版］産業統計研究社，の作成である。これは内海・和合二郎氏の要請に応えたものであるなどの事情が訳者あとがきに示されている。気軽に引き受けたが苦労が大きかったことが想像できる。この「訳」を通じて，社会統計学の基本に位置する蜷川理論を深くふまえたと思う。これに先立って，（1984）「蜷川統計学における集団論」を書き，蜷川の英文論文「社会集団の性質にかんする一考察」の日本語訳（1988）をしている。③数理形式主義批判も旺盛であった。統計数理の手法にも立ち入っていたが，手法を適用している現実の問題，あるいは手法あるいは適用者の基礎の思想に照らした批判によって説得性を持っていた。上記（1972）論文，（1975）「『平均』に関する一考察」，（1994）「偏差値をめぐる諸問題」や，次項⑷の論文も関連する。（1968）のホグベンの訳や「仮説検定は有効か」の分担訳，もこれら検討の基礎にあろう。

⑷地方自治体の統計等活動への参加－東京都と埼玉県　人柄がおおらかで，必要な仕事はしっかりと引き受け，以下にも述べる分析視角を持っていたので，故木村太郎会員や三潴会員その他の人々から重宝がられていた。埼玉在住だったので，畑県政の外郭的研究組織であった県の社会経済総合調査会において，木村太郎氏の下で，山田貢会員とともに，調査・研究を担当したし，美濃部都政下で三潴会員をチーフとした東京都生計費指数研究会のメンバーでもあった。

⑸人権視角・偏差値　以上の研究を通じて，一貫しているのは，（1983）「統計調査と人権をめぐる諸問題―精神衛生実態調査批判―」，（1997）「統計方法について―科学と人権の視点から―」にも見うるように，庶民・大衆目線からの旺盛な批判精神である。人間社会の豊かさを，競争主義ではなく，相互扶助・連帯とつなぐ氏の見地とむすびついて，氏の論議には読者をひきつけるものがある。

３．経済統計学会の運営面での貢献

学会の運営面での貢献も大きい。1970年代半ば以降から2000年代前半までの約30年間の半分以上の年間に，関東支部の運営委員（したがって全国運営委員）や編集委員になり，90年代から2000年代にかけて，全国を念頭

におく関東支部の事務局責任者にもなった。1984年の第28回全国研究総会では総評会館を会場とし，会場の設営を氏に依頼したことがある。

1976年発刊の記念号第一集，1986年の第二集の発行にあたっては，氏が，山田貢，伊藤とともに関係実務をかなり担ったし，『統計学』通常号の最終校正では，産業統計研究社によく集まったものだった。1990年代後半以降も，勤務校での忙しさにもかかわらず，関東支部例会への出席は多かった。マイルドな表現ではあるが，鋭く問題点をついていたやりとりが印象深い。

4．想い出のいくつか

統計学を離れると，想い起こすことは沢山ある。講道館系柔道の有段者であった。60年安保の時期であった学生時代にはいわゆる学生運動の主流派の拠点であった北大新聞会に属していたし，記憶によれば，3年生のときに同学年生の『雄叫び』という小雑誌を発刊に加わり，「お釈迦様とマルクス」というタイトルの原稿を書いていた。この時期に戸坂潤から出発して日本のマルクス主義哲学への造詣は深かった。大工仕事が得意であり，恩師内海庫一郎の札幌，大宮，東京のお宅で，本棚や書庫，その他のかなり本格的な修理など広く手掛けていた。この関係もあり，内海宅で，先生の広い知識を受け止め，また文献知識を深め，先生には愛されていた。

越谷市で，当初は子どもさんの野球へのつきあいから発して，日曜日の朝野球のコーチを何十年か継続していた。育てた子どもの中にノンプロの選手になった者がいるとか話していた。氏の書き物の多くに示されている現在の教育の競争主義・偏差値主義批判を振り返ってみるとき，これへの対抗として，子どもたちの朝野球を激励することを実践していたようにも思える。

東京都の生計費指数研究会後の，三潴会員と横本氏とお茶を飲んだときに，「統計110番」というアイデアが話題になったことがある。平均数字や，多くの仮定・前提を置いた計算結果を国民に押し付けて，誤った政策へ，さらには世論を誘導しようとする「お上」にどう対抗するか，労働運動や市民運動からの疑問や不明点に関する様々の質問を広く受け付けて，統計専門家として答えるチームを構成することはできないか，という思いつきであった。私は，これを具体化するとしたら，まず横本氏に話をかければ乗ってくれるし，力強いメンバーだと考えた。しかし，この構想を具体化することなしに月日はたち，氏は帰らぬ人となった。

ここまで，主として大学や統計学関係から横本氏をふりかえった。とはいえ，以上に示したことは氏の多くの顔の半分に到達しているだろうか。例えば，(1996)「寺島一夫とその時代」『燭光－佐藤一郎遺稿集』も，統計学を離れて，戦前の日本のマルクス主義哲学・思想や経済分析の解説，また氏の情熱の一端を伝える興味深いところがある。

市民的ないしは草の根からの思考の徹底，弱音をはかない楽天的・前向きな指向，豪放さとあのにぎやかな笑い声を思い起こし，また，「研究の形式主義化はもういいかげんにして，根本を問い，市民に寄与するものを示してもらいたいよね」という声をききながら，ご冥福を祈りたい。

執筆者紹介（掲載順）

稲葉和夫（立命館大学 経済学部）
橋本貴彦（島根大学法文学部）
山田　彌（立命館大学 経済学部）
池田　伸（立命館大学 経営学部）
大井達雄（藍野大学 保健医療学部）
吉田　忠（経済統計学会）
伊藤陽一（日本統計研究所）

支部名　事務局

支部名	事務局		
北海道	062-8605	札幌市豊平区旭町 4-1-40 北海学園大学経済学部 （011-841-1161）	水野谷武志
東北	986-8580	石巻市南境新水戸 1 石巻専修大学経営学部 （0225-22-7711）	深川通寛
関東	171-8501	東京都豊島区池袋 3-34-1 立教大学経済学部 （03-3985-2332）	岩崎俊夫
関西	558-8585	大阪市住吉区杉本町 3-3-138 大阪市立大学大学院経営学研究科 （06-6605-2209）	藤井輝明
九州	812-8581	福岡市東区箱崎 6-19-1 九州大学経済学府経済学部 （092-642-2489）	加河茂美

編集委員

水野谷武志（北海道）　前田修也（東　北）
山田　茂（関　東）［副］　光藤　昇（関　西）［長］
山口秋義（九　州）

統　計　学　No.97

2009年9月30日　発行

発行所　経済統計学会
〒194-0298　東京都町田市相原町 4342
法政大学日本統計研究所内
TEL 042(783)2325　FAX 042(783)2332
http://wwwsoc.nii.ac.jp/ses/index.html

発行人　代表者　木村和範

発売所　株式会社　産業統計研究社
〒162-0801　東京都新宿区山吹町15番地
TEL 03(5206)7605　FAX 03(5206)7601
E-mail：sangyoutoukei@sight.ne.jp
代表者　品川宗典

昭和情報プロセス㈱印刷

©経済統計学会

STATISTICS

No. 97 2009 September

Articles

International Competitiveness of the Japanese Firms
..... Kazuo INABA (1)

Note

Productivity Measurement and Labor Quality
..... Takahiko HASHIMOTO and Hiroshi YAMADA (16)

Forum

Sakae SUGI's life and contributions to theoretical statistics: an introductory commentary
..... Shin IKEDA (29)

Foreign Statistical Affairs

5th UNWTO International Conference on Tourism Statistics
..... Tatsuo OI (34)

Obituaries

Hiroshi SATO (1926 – 2009)
..... Tadashi YOSHIDA (38)
Hiroshi YOKOMOTO (1939 – 2009)
..... Yoichi ITO (41)

Activities of the Society

The 53rd Session of the Society of Economic Statistics ..... (44)
Prospects for the Contribution to the Statistics ..... (56)
Regulation of the Editorial Committee ..... (61)

JAPAN SOCIETY OF ECONOMIC STATISTICS